



花で彩られた納屋橋と堀川

[特集]

堀川の水辺空間を活かし うるおいとにぎわいの創造へ

納屋橋周辺地区再生の取り組み

Contents

| | |
|----------------------------------------------------|-------|
| [特集]堀川の水辺空間を活かし うるおいとにぎわいの創造へ 納屋橋周辺地区再生の取り組み | 1~3 |
| PERSON | 4 |
| まちづくり助成団体紹介 | 5 |
| 名古屋都市センター研究成果 | 6~7 |
| まちづくり来ぶらり | 8 |
| なごやのまち今昔 | 9 |
| 活動報告 | 10~11 |
| お知らせ | 12 |



[堀川フラワーフェスティバル] のイベント



水辺の屋台に灯りのともる「なやばし夜イチ」

低迷するかつての繁華街に 活性化の新しい息吹

かつて名古屋を代表する繁華街として、また「広ブラ」(*)のメッカとして人々に愛された納屋橋地区。400年の歴史を刻む堀川と、メインストリート広小路通がクロスする恵まれた立地にありながら、高度成長期以降、名駅、栄という2つの都心核にエネルギーを吸い取られるかのように、往時のかげやきを失ってしまいました。しかし近年、都心の水辺の価値を見直し、歴史・文化を活かす、意欲的なにぎわいづくりの取り組みが相次いでいます。

※広ブラ/広小路通をブラブラ散歩すること。1971年までこの通りを路面電車が走っていた。沿道には屋台が立ち並び、多くの人々が絶えることなく行き交った。地下鉄が開通し路面電車が廃線となるのに伴い、広小路通はオフィスビルの通りとなり「広ブラ」は姿を消した。



[特集] 納屋橋周辺地区再生の取り組み



100年前の納屋橋渡り初め

民間と行政が連携して水辺を活用

納屋橋周辺地区の再生にとって重要な堀川の水辺活用については、名古屋市も民間や市民団体等と連携しながら積極的に取り組んでいます。その背景には国の河川行政の変化があります。明治時代に治水を目的に制定された河川法は、その後、時代のニーズに対応し、利水、環境を順次目的に加えていきました。2004年になると、国の通達により河川敷利用に対する規制が緩和され、指定地域に関しては営利事業やイベントを行うことが可能になりました。

それを受け堀川では2005年から名古屋市、関係団体、民間事業者が連携し、納屋橋地区でオープンカフェ、イベントなどの社会実験を開始。現在では実験の段階を終え「堀川納屋橋地区水辺活用推進事業」として、水辺を活用したにぎわいづくりが本格化しています。



架け替え100年を記念し今年5月に行われた渡り初め



若者たちにぎわう「なやばし夜イチ」

多彩な参加者、多彩なイベント

そうした取り組みのひとつに2007年からスタートし、今や堀川春のイベントとして定着した「堀川フラワーフェスティバル」があります。ライオンズクラブなど地元団体と名古屋市などで実行委員会を結成。ことし5月、納屋橋とその周辺を約500鉢のフラワーハンギングバスケットで彩りました。さらにゴンドラ体験乗船、市民団体による各種イベントなども開催。地域再生への気運を盛り上げました。

毎月恒例のナイトマーケットとしてにぎわう「なやばし夜イチ」は、名古屋の若者を中心に実行委員会を結成。2010年夏に幕を開けました。旅仲間の若者たちがラオスの古都で出会ったマーケットをイメージした手づくり夜市で、20～30の屋台が近郊農家直産の野菜、手づくり雑貨、アジア風料理、地ビールなどを扱います。ダンスやバンド演奏などもあり、堀川の水辺は華やかなお祭りムード。海外からの旅行者にもアピールすることをねらっています。

レトロ納屋橋、100年目の渡り初め

納屋橋地区のシンボルともいえる鋼製のアーチ橋「納屋橋」が今の姿になったのは1913年(大正2年)の架け替えのとき。ちょうど100年前のことです。木橋がほとんどだった時代に、鉄石混用で欄干などのデザインはアールデコ風という、超モダンなアーチづくりの橋が出現したのです。

1907年(明治40年)、名古屋港は外国と貿易する開港

場に指定され、港と市街地を結ぶ堀川は多くの船が往復するようになりました。路面電車が走る名古屋一のメインストリート広小路と堀川がクロスする納屋橋地区は、文字どおり水陸の玄関。それにふさわしい橋として架け替えられたのです。昭和のモーターゼーションの時代に拡張の必要からさらに架け替えられましたが、大正時代のアーチ橋のデザインは踏襲されています。

大正の架け替えからちょうど100年を迎えた今年5月、堀川フラワーフェスティバル実行委員会とレトロ納屋橋100年実行委員会の共催で「100年目の渡り初め」と「ゴンドラウェディング」が行われました。

納屋橋東地区で大規模再開発

広小路通と堀川がクロスする一角、納屋橋東地区の再開発は昭和のころからの懸案でした。地権者による準備組合が1991年に発足し、2007年に住宅と商業施設からなる超高層ビル建設を決めたものの、翌年のリーマン・ショックで計画は白紙に。曲折を経て昨年、新たなパートナーを公募し、三井物産を中心とする特定業務代行者が決定しました。

計画の概要は、地上30階建ての住宅棟と商業棟や業務棟を予定。堀川に面したスケールの大きいテラス、堀川～東側街区と通り抜けのできる通路を設けるなど、公共空間と回遊性を重視しているのが特徴です。2014年4月には組合を設立し、2015年2月に着工。2017年6月の完成をめざしています。

開削400年の堀川、架け替え100年の納屋橋。路面電車、



納屋橋東地区市街地再開発のイメージ

自動車の時代とともにメインストリートの役割を担う広小路通。水陸の歴史の主役が交差する納屋橋地区で、まちづくりの新しい動きが広がろうとしています。

納屋橋、堀川の歴史と文化を耕し 物売るのではなく時間を売るまちに

広小路通を路面電車が走り、堀川に舟運があったころ、その両方が交差する納屋橋周辺は人の流れと物流の結節点でした。その後交通手段が変化し、よごれた堀川に人々が背を向けるようになり、この地区は衰退しました。でも納屋橋地区のポテンシャルを顕在化させ、もう一度集客しようという再生の取り組みは活発になっています。ポイントは堀川です。納屋橋の可能性＝堀川の可能性なのです。

多くの人が参加してカヌーで堀川の清掃をしたり、

水上ステージで能と歌舞伎をやったり、イベントの一環として納屋橋、円頓寺、名古屋城を結ぶ水上バスを運行させたりしています。堀川を花で飾り、きれいになった水辺で催しを楽しむフラワーフェスティバルは春の風物詩として定着しました。ことしはレトロ納屋橋100年を記念する渡り初めイベントも行いました。納屋橋、堀川は名古屋の歴史と生活の生き証人です。歴史と文化を耕し自然を大切に、物売るまちはではなく時間を売るまちにしたいですね。

レトロ納屋橋100年
実行委員会事務局長
にさか かずひろ
丹坂和弘さん

